

榎本秋先生による短編小説添削

添削例

中には何が入っているのか
示唆できる描写がほしい。
また、仮に死体だとしたら、
血が目立つ白を選ぶだろうか。

建物などの
※何の姿形なのか
わかるように

『ありがとうね』

唯一の光であるバーのネオンが、深夜の夜道を照らす。それでも姿形を捉えるには厳しい視界だが、ルイは迷うことなく進んだ。

服には誰のかも分からない血がべっとりと付着して、右手には白い大袋を引きずっている。傍から見れば怪しすぎるのだが、その後ろぴったりとついてくる小さな影があった。

「おじさん。殺し屋のおじさん」

幼女の声に振り向けば、大袋をつつく少女と目があった。歯の抜けた笑みを見せられ、ルイは大きなため息を吐いた。

「なんで、ついてくる」

「だーかーらー。いったでしょ。行くところないの」

「だからって、なぜ俺に」

「一番、安全だと思っからー」
髪

その言葉に、ルイは今しばらく自分の姿を見直した。手も足も、おまけに紙まで血で染まり、袋を持つ逆の手には鉈を抜き身のまま持っている。どう見ても、安全にはほど遠いだろう。
見

トル
※セリフの最後に
句読点は入らない

ルイは再び訊き返した。

「お前の言っていることが、分からないのだが」

頭がおかしい奴らは、この町には数えきれないほどいる。実際にルイも見えてきた。しかし少女の純粋な瞳は、ルイを最も混乱させた。

「だってさ、殺し屋って頼まれない限り、無闇な殺しはしないんですよ？だったら無関係な私は安全じゃない」
少女はカラツとした口調で堪える。それに、と少女は続けた。

「家のほうが、死にそうなんだもん」^{IP}

すす、と少女が腕をさすれば袖がめくれる。その一瞬で見えた腕には、無数の痣と切り傷が刻まれていた。

大方、虐待か。はたまた別のものか。どちらにせよ自分が深く介入するところではない。

ルイは暫く少女を見つめていたが、諦めるつもりはな
いらしい。自分が折れるしかなさそうだ。

「……寝床、なんて贅沢なものはないぞ」

「屋根があれば、立派な寝床よ」

ふふ、と少女は笑いルイと並んで歩く。大きな影と小さな影は、そのまま裏路地へと消えていった。

榎本 秋先生からのアドバイス



榎本 秋先生
(小説創作科 講師)

少女はどこで殺し屋を見つけたのでしょうか？ 常道は「殺した相手の娘」あたりですが、発言を見る限りそうではなさそうです。二人の出会いを簡単にでも書けると読者のイメージの助けになります。

少女の外見描写があると、彼女がどれくらい家でひどい目に遭っているのかがなんとなくわかります。

タイトルが少々意味深に見えますが、作品を読み終わったあとにあまり繋がりを感ぜられませんでした。作中のラストに同じことを言うか、他のタイトルに変更も検討した方がいいかもしれません。